

陰陽五行説の由来と白色の意味—陰陽五行説と四大元素説の比較

The Origin of the Yin-Yang Five Elements Theory and the Meaning of White: A Comparison of the Yin-Yang Five Elements Theory and the Four Classical Elements Theory

吉村 耕治 Kohji Yoshimura
山田 有子 Yuko Yamada

関西外国語大学
色彩講師・挿絵画家

Kansai Gaidai University
Color Instructor, Illustrator

Keywords: 陰陽五行説の由来、白色の捉え方、四大元素説との比較、天の思想、気の思想

が少なくなる状態の「少陽」と考えられ、金曜日は陰、土は陰と陽が中和された状態の「太極」で中庸を表している。つまり、七曜日は、陽・陰・陽・陰・陽・陰・太極の順になっている。

1. はじめに—陰陽五行説の由来

私たちの生活習慣の中には時空を超えて、古代からの伝統が息づいているものがある。例えば、1週間を7日とする考えは、古代バビロニア（メソポタミアの南部；現在のイラク；前2004-前1530年）から由来している。現在の曜日は七曜（しちよう）が基になっている。古代バビロニアでは肉眼で見える惑星が、「月・水星・金星・太陽・火星・木星・土星」の順に並んでいると考え、この順番を三つ目ごとに遡って、太陽、月（太陰）、火星、水星、木星、金星、土星の順になっている。古代では七曜が1時間ごとに地上を守護していると考えられていたため、地球から最も遠い土星を起点にして、内側に進むと、翌日の第一時間目の守護星が太陽になる。第一時間目の守護星が、その日の守護星とされたため、その日は守護星の名で呼ばれ、現在の曜日が決定されている。

この七曜と七星の考えが、古代の中国に伝わり、天体の太陽（日の別名）と太陰（月の別名）に由来する二元（分）的關係の陰陽説と、水星・金星・火星・木星・土星という五つの惑星の数に対応して、五行思想が生まれている。戦国時代（前403-前221）に陰陽説と五行説が統合されて陰陽五行説が成立している。五行は、混沌（カオス）から太極（万物の根源で陰陽の二元が生まれる）を経て生み出されたと考えられている。太陽の「太」は「甚（はなは）だしい」の意で、太陽は昼に現れるために陽気の精と考えられて、日曜日は陽で、太陰である月は夜に現れるために陰気の精と考えられ、月曜日は陰、火は暑くて陽気が成熟した状態の「老陽」とされて、火曜日は陽、水は冷たくて陰気が成熟した状態の「老陰」とされて、水曜日は陰、木は生命体で軟らかく陽気が増えて陰気が少なくなる状態の「少陰」と考えられ、木曜日は陽、金属は非生命体で硬く陰気が増えて陽気

2. 古代オリエントと中国との交易

人類が道具の材料として最初に利用した金属は銅で、錫を含まない自然銅を使用していた時代は銅器時代（石器・金属併用時代）と呼ばれる。主成分は銅であるが、錫や鉛を含む合金が青銅である。メソポタミアやエジプトの青銅器時代は、前3500-前1500年頃である。メソポタミア北部は、オリエント各地を結ぶ交易の中継地になっており、青銅器文化は、古代オリエント（エジプトや西アジア）からアッシリア（Assyria）人のような各地の商人によって古代中国に伝わったと考えられる。中国最古の古代王朝の殷（自称、商；「商人」の語源；前c.1600-前1046年）は、夏（か；前c.2070-前1600年頃）を滅ぼして王朝を立てたとされる。中国の青銅器時代は、前1700-前1600年頃に始まり、前221年頃まで続いたと考えられる。中国の二里头文化期（にりとうぶんか：Erlitou culture；前c.2000-前1600年頃）の青銅器の様式や製造法を受け継いでいるのが、河南省北部の鄭州（ていしゅう）市の二里岡文化（にりこうぶんか：Erligang culture；前1600-前1400年頃）の青銅器で、様式が均一化され、洗練されることにより青銅器の使用が広まっている。二里岡文化は、中国の黄河の中流から下流を中心に栄えており、初期の殷（商）王朝の都城も発掘されている。

3. 甲骨文字の卜辞に残された白の意味

殷の王は、占いをういて神の意志を確かめ、占いに基づく神権政治を行っていた。現在、確認できる最古の漢字は、殷の時代のもので、亀の甲羅の腹甲や、牛や鹿などの肩甲骨に刻まれているため、甲骨文字（亀甲獣骨文字、甲骨文）と呼ばれる。エジプト文字を簡略・抽象化してフェニキア文字が生まれ、フェニキア文字が貿易を通じてギ

リシャに伝わりギリシャ文字になり、イタリア半島に伝わり、ローマ字の **alphabet** になっている。象形文字 (**hieroglyph**) はエジプト文字だけではなく、甲骨文字も象形文字 (絵文字) で、抽象的な形の文字に発達し、漢字が生まれている。

占ト (せんぼく: 占い) は、甲骨文字で獣骨に刻んだ文字のト辞 (ぼくじ) に記録されていた。吉凶の占いに甲骨文字が用いられたことにより、甲骨文字が残っている。占いを担当する神官が貞人で、殷代のト辞の甲骨文は、現存する中国最古の文字史料になっている。殷の時代に重視された祭儀の火祭りでは、神に捧げられる犠牲として白い犬や、白牛、白馬、白豚 (野ブタ)、白鹿などが選ばれている。『貝塚茂樹著作集 3: 殷周古代史の再構成』の「中国上代史素描」でも、「殷民族特有の神事に清浄な白色を用いる呪術的習慣が存在」(中嶋 1986: 90) したことが指摘されている。『礼記』(らいき; 周の時代から漢にかけて儒学者がまとめた礼に関する書物、全 49 篇) の「壇弓」には、「殷人は白を尚(とうと)ぶ」と述べられている。殷人が白を重要視したことは確かとされる。

後漢 (25-220 年) の学者、劉熙の著わした『釈名 (しゃくみょう)』(中国の古代語に見られる語の意味を研究した書物) の布を染める色名について書いた「釈禾帛」に、「白、啓也、如冰啓時色也」(cf. 中嶋 1986: 90) とある。白は啓 (神の啓示、つまり、お告げを見ること) を表し、氷のひび割れた色で、白い雪のような感じの輝きのある白だという。氷は、氷の意で、純白で清く明らかなもの、啓も「ひらく (明ける)」を意味し、「明けの明星」の意もある (cf. 中嶋 1986: 90)。

4. 陰陽五行思想における白の意味

「五行」の「行」は行いや働きを意味する。世界のすべての物事は、「五行」の中の何らかの性格に当てはまるという考えである。五行の配当の順序や配当されるものは、時代や作者によって変化しているものと、変化していないものがある。五行思想における五星の一つである金星 (別名、太白; ラテン語の **Venus**、英語でも **Venus**) は、太陽系で太陽に近い方から 2 番目の惑星で、地球に最も近い公転軌道を持ち、太陽、月に次いで明るく見え、明け方と夕方にのみ観測される。そこで、明け方に見える金星は「明けの明星」、夕方に見える金星は「宵の明星」と呼ばれる。金星は、文語で太白星とか太白と呼ばれ、五行思想の五色

においては、明るく見えるために「白」を表す。

金星は、金曜日と呼応しており、金曜日は、陰気が増えて陽気が少なくなる状態である「少陽」と考えられている。そこで、陰陽説では陰、五方については、西は陽気が陰気に変化する方位とされ、五時についても、秋は陽気が陰気に変化する季節とされ、陰気の性格に当てはまっている。

5. 天の神への崇拝

古代の中国ではシャーマニズムが信じられ、神の言葉を伝える役目の巫が、天子 (天下を治める君主) を補佐して政務を処理する最高の官、宰相 (さいしょう) に任ぜられていた。シャーマニズムとは、世界的に広く見られる宗教現象で、トランスという忘我や恍惚のような特殊な精神状態によって、神仏のような超自然的・霊的存在と直接的に交信 (接触) し、ト占や予言、治病、祭儀などを行うシャーマンを中心とした宗教的儀礼である。シャーマニズムから、天地、山川、草木、動物など、すべての自然物に神性を認める多神教が生まれている。これらの多くの神々の頂点におかれたのが、天の神、天帝で、天上の最高神を意味した。天地・宇宙・万物を支配する神 (造物主) である。古代中国より天子は、天帝を祀ることを義務 (天義) とされ、上帝の名で殷 (商) の甲骨文に記されている。天帝を祀ることは、天子の天権と呼ばれ、天子にのみ許される行為であった。

天の神の崇拝起源説については、文化人類学者の石田英一郎氏が「天馬の道—中国古代文化の系統論に寄せて」(三田史学会『史学』23 巻 2 号、pp. 46-71) で、中国周辺だけではなく、中近東にわたり普遍的に見られることから、農耕生活から生じたのではなく、ユーラシア大陸の砂漠や草原に住む遊牧民族から生まれたとする見解を示されている (cf. 中嶋 1986: 137)。遊牧民が東西の文化交流の役割を担っていた。

6. 陰陽説における氣の思想

陰陽説は、古代中国の民間信仰で、人間の社会生活と天文の運行とが相関関係にあり、人間の幸不幸、幸いや災い、個人の運命を天体の観測によって知ろうとする占いである。陰陽説は、夏王朝では連山 (古代中国における占いの書で三易の一つ)、殷王朝では帰蔵 (旧字体は歸藏、三易の一つ) と称され、周王朝で、それらを体系化して「周易 (しゅうえき)」、つまり、「易経 (えききょう)」とい

う書物が作られた。これは、後漢（ごかん：25-220年）の杜子春の考えでは、伏羲（ふつき・ふくぎ；前 3350-前 3040 年、古代中国神話の神または伝説上の帝王）が考え出したもので、周の文王（前 1152-前 1056 年）に至って完成し、周公（文王の第四子）や孔子（前 552-前 479 年）などによって補完されたものとされている（cf. 立野 1993: 57）。

陰と陽は、天候に関係している語句で、春秋時代（前 770-前 403 年）に孔子が編集した『詩経』には、陰は曇りや日影、陽は日差しや日向の意で用いられている。『易経』は、陰と陽の二つの元素の対立と統合によって、この世に存在するすべての事物の変化や法則を、占筮（せんぜい：細い竹を使用した占い）で説いている。陰陽五行の原理は、陰と陽の二元とその展開である五行の原素でできている。原初の世界は混沌（カオス）状態にあり、この混沌から光あふれる陽の気が上昇し天となり、重くて暗い陰の気が下降して地となったと考えられている。陰陽説の理論の最も根本にある考えは、「気」の思想とされる。「気」とは中国伝統の民間療法の「気功」の気と同じ意で、気の気は、雲の流れる形で、雲気を表し、生命の源泉、おもとを、気の本は、元は米と書かれ、穀物を表している。そこで、気はすべての活動力の源泉を表す（cf. 白川 静『常用字解』p. 91）。動物や植物の存在は、水や火のような存在と同様に「気」によって成り立っているが、その違いは生命の有無にあると説明されている。水や火は非生命的な存在の代表として挙げられており、生命的存在も非生命的存在もともに、「気」という存在から成り立っていることに変わりはない。

「気」は、「物」を形作っている基礎的な存在と考えられ、「気」以外の行為や現象のような非物質的な存在を含めた存在の元となるのは、「道（どう）」や「太一（たいいつ、たいいち）」と呼ばれる。「道」は、宇宙自然の普遍的法則や根元的実在を表し、「太一」は、宇宙の中心や根源を表す「一つの存在」を意味し、北極星を表すこともある。「道」や「太一」は、状態や場（物事が作用する環境）のような存在で、「気」とはそのような根本的な存在から形成されたものと考えられていた。「気」が物質的な存在を形成する元であるとする考え方が、前漢（前 202-後 8 年）の時期に一層拡大して、「道」や「太一」と同じ「宇宙の根源」と見なされ、「気」とは物質的・非物質的な存在に限らず、すべての物事の根源であるとする思想が生まれ

た。すべての物事の根源となる「道」や「太一」と同一視される「気」は、特に「元気」と呼ばれた。「元気」という思想が出てきた頃には、「気」は力（power）と同一視され、ゆるく関連付けられていた「陰陽説」と「五行説」が世界の形成や変化に関連する思想として強固に結び付けられていく。「陰陽説」と「五行説」を結び付ける仲介役をしたのが、「元気」の思想で、「陰陽」も「五行」も、「元気」から形成された「気」の性格と考えられた。最初、「気」の性格は一つであったが、二つに分かれて「陰陽」となり、さらに五つに分かれて「五行」になったと考えられた。この「陰陽」や「五行」が、すべての存在の性格を決定していると考えられた。最初に存在していた未分化の「気」が「元気」で、「陰陽」も「五行」もともに「元気」から形成された性格なので、互いに変換することができると考えられた（cf. 鈴木 2002: 74-77）。積極的な性格の「気」が陽で、消極的な性格の「気」が陰とされる。自然界の秩序は、相反する陽と陰という二つの気が調和することによって保たれる。陽と陰は、お互いに存在して初めて一つの要素に成りうる。

7. 宇宙の主宰者としての天の意思と気の思想

古代の中国人にとっては、世の中で生じている多くの物事は「天」の意思（天意）に基づいていた。宇宙の主宰者としての「天」は、絶対的な存在で、天意は、宇宙のすべての物事を形作っているとされた「気」を統御することができた。そのため、人々は天意に沿うような行為をし、天意の様相に注意した。それは、「気」の状態に矛盾しない行為をすることを意味していた（cf. 鈴木 2002: 14）。陰陽説から陰陽二気の変化の理論として「易」が成立してくると、陰と陽だけではなく、場合によっては中間の「太極（太一；万物の陰陽が変化する根源；中庸）」を含めた三種類の「気」の状態や性格の理論を説くようになる（鈴木 2002: 83）。陰と陽は対立する関係で、二分的関係（断絶した関係）と二元的関係（連続した関係）があり、陰と陽の中間の状態として太極を置いている（鈴木 2002: 89）。この太極の考えに、調和や中庸を尊ぶ東洋の思想の特徴が見られる。

8. 陰陽五行説と四大元素説

陰陽五行説では、五行は混沌から太極を経て生み出されており、万物は木・火・土・金・水という 5 種類の元素から成ると考える。つまり、木・

火・土・金・水は、この世の森羅万象を象徴している。元素の数を5つにしたのは、古代の天文学で5つの惑星（水星・金星・火星・木星・土星）が観測されていたことに由来する。この陰陽五行説と比較される思想に、西洋文化圏には四大元素説がある。四大元素説では、この世の物質は、火・地（土）・空気（風、氣息）・水の四元素から構成されていると考える。陰陽五行説と共通する要素は、火・土・水で、異なる要素は空気（風、氣息）のみである。物理的視点から考えられている。

西洋の占星術は、前2000年頃に古代バビロニアで始まっている。天の星々と神々を結び付けることによって、神々の象徴的意味が読み取られ、天の徴（しるし）が地上の出来事の前兆を示すと考えられた。占星術が古代バビロニアからギリシャに伝えられ、前332年にギリシャのアレクサンドロス大王（前356-前323年）がエジプトを征服した後、エジプトがヘレニズム文化圏（古代オリエントとギリシャが融合した文化）に組み込まれ、占星術が発達した。ホロスコープ（星位図）を用いる占星術が現れたのは、ヘレニズム時代（前332-前30年）である。その占星術のサイン（sign：宮の意）は、古代バビロニア時代に設定されたと考えられている。黄道とは、太陽の周りを公転している地球から見ると、太陽が天球を一周しているように見える見かけの通り道を表す。サインは、天球上の黄道を中心にした、太陽や月、惑星が運行する帯状の領域である獣帯（zodiac）を黄経（黄道を基準とする座標系）で、12等分した領域を意味する。12のサインは黄道十二宮と言われ、各サインには男性・女性、活動・不動・変動（柔軟）の三様相や、火・地・風・水の四大元素などの意味付けが行われている。各サインの支配星（守護星）は、春を表す白羊宮（4月）が火星、夏を表す獅子宮（8月）が太陽、秋を表す天秤宮（10月）が金星、冬を表す磨羯宮（12月）が土星、その中間に地球や月、水星、木星、天王星、海王星、冥王星が割り当てられている。ソクラテス（前469-前399年）以前の初期ギリシャ（前600-前400年）の哲学者たちは、万物（物事）の根源を神でなく、原理（アルケー：αρχή）に求めていた。アリストテレス（前384-前322年）の『形而上学』に依ると、タレース（前624-前c.546年）は四大元素の中で万物の根源を水とし、クセノパネス（前c.600年の哲学者）は土、アナクシメナス（前585-前525年）は空気（氣息）、ヘラクレイトス（前540-

前c.480年）は火、エンペドクレース（前490-前c.430年）は水・土・空気・火を根源の元素とした。

9. 陰陽五行説に見られる循環の思想

五行における五元素の配列には、生成（せいせい）説、相剋（そうこく）説、相生（そうじょう）説の三種類がある。陰陽説と五行説を統合して陰陽五行説が成立しており、五行が混沌から太極を経て生み出され、五行の生成順が確立している。陰の中で特に冷たい部分が北に移動して水が生じ、陽の中で特に熱い部分が南に移動して火が生じ、残った陽気は東に移動して風となって木が生じ、残った陰気が西に移動して金（金属：鉱物資源）が生じる。つまり、水・火・木・金・土の順になる。相剋説は、前4世紀末に唱えられ、木は土の栄養を吸収するので、土に勝ち、土は水に勝ち、水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝つことを意味する。つまり、木・土・水・火・金の順になる。相生説は、前1世紀末ごろの前漢末期に唱えられたもので、木は火を生じ、火は土（灰）を生じ、土は金を生じ、金は冷えると表面に水（水滴）を生じ、水は木を生じさせることを意味し、木・火・土・金・水の順になる。このような循環は、自然界における多様な事物の永遠性を象徴している。

10. おわりに—青銅器とともに伝わった天の思想

楔形文字を使うメソポタミアの青銅器や古い甲骨文字を持つ古代の中国に伝わりと同時に、西洋の天体の神化とその象徴的意味付けやサイン（宮）が古代の中国に伝わり、天意という考え方が生み出されている。天意は気を左右し、陰陽説の気の思想が考え出された。陰と陽には、断絶した二分的関係と連続した二元的関係があり、陰と陽のバランスの重要性が内包されている。調和を保つ思想として太極（中庸）が考えられている。初期ギリシャの「火・地・風・水」は物理的要素を表すが、四大元素説に繋がる「木・火・土・金・水」から成る五行説は精神に結びついている。

主要参考文献

- 1) 白川 静 (2003) 『常用字解』 東京：平凡社。
- 2) 鈴木一馨 (2002) 『陰陽道—呪術と鬼神の世界』（講談社選書メチエ 244） 東京：講談社。
- 3) 中嶋洋典 (1986) 『五色と五行—古代中国点描』（ぼんブックス 14） 東京：世界聖典協会。
- 4) 吉野裕子 (2003) 『五行循環』（ワンデマント版） 京都：人文書院。